こんな老い方もある

佐藤愛子

こんな老い方もある

佐藤愛子

海竜社

著者紹介　佐藤愛子（さとう　あいこ）

大正12年，大阪生まれ。往年の人気作家，故佐藤紅緑氏の末娘で，詩人の故サトウ・ハチロー氏はいちばん上の兄にあたる。甲南高女卒業後，20歳で海軍士官と結婚し，二児をもうけたが，戦後に離婚。昭和44年『戦いすんで日が暮れて』で第61回直木賞受賞。昭和54年『幸福の絵』で女流文学賞を受賞。小説・エッセイと幅広い創作活動を続ける。

こんな老い方もある

平成二年五月八日　第一刷発行
平成二年五月三十日　第二刷発行

著　者＝佐藤　愛子
発行者＝下村のぶ子
発行所＝株式会社　海竜社
東京都中央区築地二の九の二　〒一〇四
電　話＝東京〇三（五四二）九六七一（代表）
振　替＝東京一―四四八八六
印刷所＝白陽舎印刷工業株式会社（上製）
製本所＝大口製本印刷株式会社
落丁本、乱丁本はおとりかえします。

© 1990, Aiko Sato, Printed in Japan

ISBN4―7593―0257―3

こんな老い方もある——目　次

〈私の覚悟〉

こんな老い方もある
覚悟を決める——6
最後の修業——10
なんでこうなるの？——13
もう沢山——26
棚の上——44
いたわしいけど、投げなきゃなんねぇ——49
失ったもの——52
見えないものの力——55
書くことに支えられる——59

〈女の視線〉

こんな感じ方もある
挨拶なし——64
ジーンときた話——69

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

知識の禍――72
心にないこと――77
晩成のしそこない――91
男の真価――96
結婚の幸福――101
娘よ、幸福は自分で創れ！――104
痛ましい時代――109
北海道よ、お前もか――114
「ある」ということの不自由――120

〈私の選択〉
こんな出発もある
抑え込まれた青春――124
戦争からの出発――136
同人誌の無頼な仲間たち――144
私の習作時代――159

青春クライマックス――172
〈暮しのたし算 ひき算〉
こんな愉しみ方もある
自然とのこんなおつき合い――186
ヒマラヤ杉のある家――191
一瞬の喜びのために――194
タロの過去――199
株のだいご味――203
私のたし算 ひき算――209
親の生きざまこそ教育――212
ボカシの裾模様――215
ぬくずしの湯気――219
あとがき――222
ブックデザイン――灘本唯人

［私の覚悟］

こんな老い方もある

覚悟を決める

自然に従って生きる

ある新聞社から、年寄りの男性方に女の立場からエールを送ってほしいという依頼を受けた。女性が男性を凌ぐ勢いをもってきた当今、萎縮気味の男性を激励してほしいというのである。しかしこの私は六十路も半ばを過ぎ、今や男とも女ともつかぬ存在になり果てた身である。女性の立場から一言といわれても、何の言葉も出てこない。

年をとっても尚、元気で美しく楽しく過すにはどうすればいいか、女の先輩として一言、というコメントもよく求められるが、そんなことは考えたこともないから、こちらの方で訊きたいくらいである。でもあなたは声は大きいし歩くのは早いし、どこからそんな元気が出てくるのですか、といわれて気がつく。そうか私はまだ元気なのか、と。

だがこの元気は空元気なのであって、なぜ空元気が出るかというと、これは私の戦闘的な気質のためなのであろう。私は私の性分に引きずられてそうしているだけであって、意

志的に元気を出しているわけではない。考えてみると空元気を出せるということはまだエネルギーが残存しているということで、やがては空元気も出なくなってしまう日がくるのだろう。だがそれは私にとっての自然であるから、それはそれでよろしいのである。

だがその時に、さあ佐藤さん、元気を出して下さいよ、前のあなたはどこへいったの、これからの年寄りは年をとったからといって引っこんでいてはダメですよ、おしゃれをして外へ出て楽しむのよ、お友達を沢山持って、恋もセックスも大いに楽しめばいいのよ、などといわれると私は困る。「引っこんでないで」といわれても私は引っこんでいるのが好きになっているのである。おしゃれをするのも面倒くさい。だから出不精になる。するとソレソレ、それがいけないのよ、それじゃ老い込んでしまいます、とお説教される。

老い込むのが何が悪い、と私は怒りたくなる。老い込むことが私の自然であればそれに従えばよいではないか。

私にとっての自然とあなたの自然とは違うのだ。七十歳になっても五十代に見え、真紅のドレスの似合う人は、それだけのエネルギー、気持の晴れやかさがあるから似合うのであって、その人が似合うからといって私が真紅のドレスを来て現れたら、ばあさんの漫才師が来たと人は思うであろう。漫才師に見えるか見えないかは、その人にとってそれが自然か、無理をしているかの差である。

本当の年齢から十も若く見えたとしても、ただ、それだけのことであって、とりたてて自慢するほどのことでもない。羨望することでもない。

今ここにある自分に満足する

今は欲望の充足が幸福だという思い決めが横溢している時代である。欲望は人間に活力を与えるもとであるから、欲望を盛んにするのがよいと多くの人が思っている。そう思うようになったのはマスコミが商業主義のお先棒を担いだためにちがいない。快楽は幸福であるという思い込みが価値観の混乱を招き、諦念や我慢は恰も悪徳ですらあるかのようだ。「老人にも性欲がある。それが人間の自然なありようであるからには、それを隠したり恥じたりする必要は少しもない。独り身の老人は男も女も堂々と恋愛をし、セックスの相手を求めなさい、若い者は老人のためにそれを理解し、認めなくてはいけません」という提言も盛んである。

それを耳にすると私はムッとする。「余計なお世話だ」といいたくなる。老人自身がそう主張をしているのならともかく、十も二十も年下の者からそんなことをいってもらって有難がるわけにはいかぬという気になる。それは頑迷傲慢ではなく、気概を持ちたいという気持からだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

かつて老人が老後の幸福として願ったことは心の平安というものではなかったか。それは「今ここにある自分に満足する」ということではなかったか。しかし快楽が幸福だと考えられるようになった今は、今ある自分に満足することがむつかしくなってきた。老いても容易に涸れぬエネルギーが、「楽しい老後」を持ちたいという思いを膨張させる一方で、やがてくる病と死への不安は恰も慢性の病気のように絶えず鈍い痛みを与えているのである。

老人の人生経験は今は後輩たちに何の役にも立たない時代だ。人生の先輩として教えるものは何もなく、従って老人に払われた敬意はカケラもない。あるのはただ形式的な同情ばかりだ。そんな時代に老後を迎える私がこれから心がけねばならぬことは、いかに老後の孤独に耐えるかの修業である。若い世代に理解や同情を求めて「可愛い老人」になるよりも、私は一人毅然と孤独に耐えて立つ老人になりたい。それがこれからの目標であり、それを私の人生の総仕上げとしたい。

最後の修業

楽しい老後はあるか

今は老いも若きも、殆どの日本人が人生は楽しむもの、楽しくなければならないと思い込んでいるようである。それはまるで強迫観念になってしまったかのような観さえあり、国中に楽しみを得るための情報が氾濫している。

この十一月で六十六歳になった私には、楽しい老後を過すにはどうすればいいか、という質問が始終くる。だが私のような貧乏性の人間は、楽しい老後とはどういうものか、よくわからない。元気に働きつづけるのが私にとっての「楽しいこと」のような気がするが、どうもそんな答では通用しそうにない空気が世間には流れているようである。

楽しい老後を持つためには気持を若く持つこと、老い込んではいけない、おしゃれの心を持ちなさい、進んで外へ出ること、グループを作ること、趣味を持つこと、年を忘れて恋をしなさい、セックスをしなさい、と数々の情報は教える。

けれどもねぇ、と私は思う。年を忘れて恋をしなさいといわれても、これは相手がいることだから、年を忘れるのは自分よりも相手にお願いしなければならないことではないか、つらつら鏡を見れば相手にそれを望むのも無理であることがよくわかる。恋の相手は分相応の相手でなければ成立しがたいが、果して分相応の相手を好きになれるかどうか、これは難問題である。外国旅行を楽しみなさいといわれても、すぐに腰痛が起ったり、苛酷なスケジュールにヘトヘトになったり、ツアーの中に必ずいる遅刻常習者や忘れ物の名人などに腹を立てたりして、折角の外国旅行が楽しいどころか疲労と怒りの日々になるであろう。「楽しい老後」と情報提供者はこともなげにいうけれど、体力（若さ）を失っている身には、そう簡単に手に入るものではないのである。

私の死に支度

どんなに頑張っても人はやがて老いて枯れるのである。それが生きとし生けるものの自然である。それが太古よりの自然であるとすれば、その自然に自分を委ねるのが一番よい。私はそう考えている。

そこで今、私が直面している問題は、いかに自然に老い、自然にさからわずに死んでいけるか、ということだ。いかに孤独に耐え、いかに上手に枯れていくか。長命がめでたい

のは、心も肉体も枯れきって死ねるからめでたいのだと私は考えている。肉体にエネルギーが残っている間は死ぬのは容易ではない。心に執着や欲望を燃やしたまま死ぬと、死後の魂は安らかでない。

今、多くの老人は老後を楽しく送りたいという願いの一方で、人に迷惑をかけずに死んでいきたいものだと心から念じている。家族主義の中で老人が大切にされ、うやまわれていた時代は老いて病むことも子や孫に預けておけばよかった。しかし犠牲を悪徳のように考える今は、身内の者が平和に楽しく暮す権利を認めなければならないから、老人はひたすら迷惑をかけることを怖れている。六十歳も半ばを過ぎて、私は漸く自分の死について考えるようになった。私も遠からず老い衰えて死を迎えるのである。そのためには私なりに準備をしておかなければならないと思っている。

これからの老人は老いの孤独に耐え、肉体の衰えや病の苦痛に耐え、死にたくてもなかなか死なせてくれない現代医学にも耐え、人に迷惑をかけていることの情けなさ、申しわけなさにも耐え、そのすべてを恨まず悲しまず受け入れる心構えを作っておかなければならないのである。どういう事態になろうとも悪あがきせずに死を迎えることが出来るように、これからが人生最後の修業の時である。いかに上手に枯れて、ありのままに運命を受け入れるか。楽しい老後など追求している暇は私にはない。

なんでこうなるの！

窓のあるキッチンに心を奪われて

静岡県伊東に仕事部屋――というよりは東京の暮しの繁雑さからの逃げ場としてマンションの一部屋を買うことに決めた時、地震のことを考えなかったわけではない。

三原山の噴火前から、伊豆半島には大地震がくるという噂があった。私は昭和四十五年に伊豆半島の真ん中の天城高原に土地を買ったまま、二十年近く経った今も売るに売れずにいるのは、この地震の不安のためである（と不動産業者はいう）。

昭和四十五年といえば、私のモト夫が破産して三年目。私は借金返しのために死にもの狂いになっていた時である。そんな時にまたなんで土地なんぞを買ったのかというと、その時私の破産亭主が立ち直るために二つ目の会社（広告代理店）を作り、東急不動産の別荘分譲地であるこの土地を買ってくれれば東急から仕事が貰える、助けると思って買ってくれと頼みこんできたからである。

離婚した女房のところへ、よくもまあ馴れ馴れしくそんな頼みごとをもってくるものだと私は怒り、何という理不尽、何という情けない男だと罵りながら買ってしまった。二度目の会社が成功すれば、私が肩代りした借金を少しは助けられる、というテキの言葉にふと心を動かされてしまったのである。

三百坪買ってせっせせっせとローンを払って、漸く払い終えた。たまたま金の必要があって売ろうとした。

売れない。

なぜ売れないのか。天城という所は伊豆にあるから、暖かいと思うだろうが、標高が軽井沢と同じで冬は樹氷が出来るほどに寒い所で、ゴルフ場なども閉鎖されるという。そんなら夏はいいかというと、夏は夏で霧が多くて、ゴルフをしていてもボールが見えなくなってしまうのだという。そのうち地震の噂が出てきた。

「天城ですか、いやあ、伊豆は地震の心配があるもんでねエ」

と業者は相手にしてくれない。

いったいいくらなら売れるのかと訊くと、値段というものは需要があってこそのものですからねえ、と東急不動産はすまして買手がないことを宣告した。

日本全国、どんな土地でも二十年前の何倍かの値段になっている今日この頃である。そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.